

## 真言宗の檀信徒像とは

小峰立丸

### 一、檀信徒の現状と問題点

- (イ) 私の見た檀信徒の問題点
  - (ロ) 新宗教が訴えかけたこと（新宗教の目指す信徒像とは）
  - (ハ) 伝統教団の教化運動
    - (a) 他宗派の目指した檀信徒像とは
      - ① おてつき運動（浄土宗）
      - ② 一隅を照らす運動（天台宗）
    - (b) つくしあい運動が目指した檀信徒像とは
- 二、これからの檀信徒像を目指して
- (イ) これまでの寺院と檀信徒との関わり方の問題点
    - (a) 葬儀・法事
    - (b) 伝統行事
    - (c) 日常活動
  - (ロ) 真言宗の檀信徒像とは

三、まとめにかえて

何が問題か、今後の課題は

一、檀信徒の現状と問題点

(1) 私の見た檀信徒の問題点

檀信徒は日常生活のなかで、自分が仏教徒であり、◇◇寺の檀信徒であるということをどれだけ自覚し、意識した生活をしているのであろうか。

確かに、葬式や法事を営む上でお寺を必要とし、そして悲しみをいやし、ほとけの救いを願っていることは明らかである。その心情は菩提寺に対する浄財の協力などで形に表されてもいる。このような形で何十年が経過して来た。しかし葬式仏教と言われる現今、葬式や法事をはなれ、日常生活の中で檀信徒が悩み、苦しみに直面した時、それらに対処し、対応していく上で何が力になり、何が励みになったのだろうか。そこに真言宗の教え、仏教があるのだろうか。

戦後の新宗教の目覚ましい進出や最近の若者を取りこにする様々な宗教の動きを見る時、真言宗の僧侶として少なからず不安の念を起さざるをえない。

これからのように寺院を運営していくべきかを模索していく上で、寺院とは何か、檀信徒は寺院に何を求めているのだろうかと改めて考えてみると、果たして今まで自分自身が、どれだけビジョンのもとに教化活動を実践し、檀信徒の悲しみ、悩み、つまり人間の避けておれない苦悩に取り組んで来たかという自責の念があるのである。

僧侶の基本的姿勢の問題でもあり、それは寺院の運営にも連なる大問題である。

本論は檀信徒像とは、という目標をかかげてはいるが、それは僧侶である我々自身が自分の信仰の何であるかを明らかにしていく問いかけでもある。

二年次にわたる研究の一応のまとめとして報告し、今後の自坊における教化活動においてその成果を見いだしていきたいと願っている。

(四) 新宗教が訴えかけたこと

人間は皆一生のうちに様々な悩み、苦しみに出会う。どんなに時代が移り社会状況が変化しても、新しい時代や社会状況に応じた悩み、苦しみは絶えない。昔から「苦しい時の神だのみ」といわれているように、人間は苦しい時、悲しい時、困った時、何かに頼りたくなる。ましてや人間の力では解決のつかぬようなものに出会うと、どうしてよいか分からなくなり、その解決の為に、人間以上の目に見えない力、あるいはものの助けを求めることになる。藁をもつかむおもいで神仏にすがりつく。個人の欲求充足の為に、大衆の不安や欲求不満を導火線として、多く信者を獲得し、一般在家の人々もその組織の中に組み込んだ大衆信仰団体の形をとる多くの新宗教教団が生まれてきた。

新宗教の教義は大体において現世利益と祖先崇拜とシャーマニズム(神がかり的)などをまぜあわせたものである。

新宗教という祖先崇拜とは、病気がなかなか治らなかつたり、災難が続いたりすると、死者が浮かばれていない、霊が苦しんでいるから供養しなさいという「死霊崇拜」の場合がほとんどである。

つまり新宗教教団は新しい装いの教義と迫力のある布教方法によって、大衆の欲求不満を的確にとらえ、時代にア

ピールした教義や行事を活発に行い、信者の獲得を第一目的としてきた。<sup>(1)</sup>

近年では、「新・新宗教」とよばれる新しい宗教が台頭し、「第三次宗教ブーム」と言われている。室生 忠氏（ジャーナリスト）によれば、現代の若者が、新宗教に走る理由として、若者たちの望んでいることは、説教を聞き、頭脳によって理解することではなく、瞑想によって直接、無意識世界に飛び込み、「神」と交流し、直結することであるとしている。したがって、「修行」の意味合いも、心を修める行為というより、自己の無意識に飛び込み、あるいは、無意識を白昼に引っ張り出す、そのノウハウを身につけるための「学習」に近い。<sup>(2)</sup>としている。

また、戦後の宗教群は、大衆の「貧・病・争」のニーズに応えたが、現在の老年層の最大の動機は、「病・争」であり、むしろ、「富・病・争」であるとしている。富を背景にした高齢化社会と、医療の完備に比例して増大する、難病への恐怖心である。過度の医療によっても治らない、病への絶望感を動機として、霊能治療に吸引されていく。富がむしろ、近親者や、悪徳商法とのトラブルを生み、「死への恐怖」を増大させている。<sup>(3)</sup>としている。

(イ) 伝統教団の教化運動

(a) 他宗派の目指した檀信徒像とは

① おてつき運動（浄土宗）

総本山知恩院の教化運動である「おてつき運動」は、戦後民主主義の政治体制のもと戦前における家を中心とした社会制度が根底から崩壊しつつあり、家より個人へという観念が強まり、それに付随して、家中心の檀家制度が崩れさろうとしていること、あるいは、社会的、政治的転換期における新宗教の台頭が目立ち、特に既成教団に大きな影響を与えたこと等が原因となり、教団自体に危機感が浸透してきたことからであった。

従って、その運動目標は

- 1、家の宗派所属から個人の信仰への切りかえ
  - 2、個人的信仰者の集団組織として活きた教団組織への脱皮
  - 3、教団組織の実現によって、人心革命を実現して民衆の福祉と人類国家の平和を将来せしめなければならない。
- ということであった。

この運動は、教化運動の実践母体として発足した「総本山護持会」の総本山護持会運動として、昭和三十七年に提唱されたものであるが、昭和四十一年に「おてつき運動」と略称された。<sup>(1)</sup>

すなわち、総本山護持会の「おてつき運動本部」全国八千の寺院、五百万信徒の教化活動センターとして運動の中心となり、僧俗一体となり、法然上人の念仏信仰を純粹に体得する運動で、寺院は、宗祖上人の念仏の教えをとりついでいく、いわゆる「おてつき寺」であり、寺院の住職によって檀信徒一人一人が念仏の導入者となり、口から口へ伝えられ、念仏者同志が手と手をつなぎあつて、自覚ある生活行動にもとづく一大信仰運動を展開することを、その本旨としている。そして運動の輪の中心である「総本山護持会」に入会してもらい、会員は毎月信行策励の資料になる『華頂』という月刊誌の購読や様々な行事への参加、資料の配付がうけられることになっている。

又この運動の一環として、総本山参拝の機会に恵まれない人々の為に、「信行奉仕団」活動を実施し、一泊二日の日程で「清掃」「法話」「参拝」等のプログラムを設け、滞在費は総本山が負担している。

しかし、「おてつき運動」として「檀家」という形の浄土宗から「浄土宗信徒」としての「人」をつくるための浄土宗信徒再認識、再編成の運動を展開して日々多数の方々の共感を呼び、「護持会会員」の数は急速に増伸しているが、その家の信仰から個人の信仰への切り替えということは理論的には諒解できても、なかなか実感として身体に念

仏の有難さをしみこませることは難しく、「先祖からの浄土宗だ」とはいいながら「私は念仏を喜んでいる一人だ」とは答える人は少ないとしている。<sup>(5)</sup>

家の宗教から個人の宗教への切り替えがいかに難しいことであるかを「おてつき運動」は示している。総本山意識の高揚を主眼の一つとしたのがおてつき運動であり、現在もまだこの運動は活動している。

## ② 一隅を照らす運動（天台宗）

昭和四十五年に天台宗の教化運動として提唱されたこの運動は、先祖供養をすることだけで終わっているように思える、従来の慣習的であった寺院と檀信徒とのつながりを、血の通った、おしえに帰依した信仰により、現代に生きている人々が同信同行の友として結ばれるよう、伝教大師の「黄金の小判がいくらあっても国の宝ではない、一隅を照らす人が国の宝である」ということばをうけ、一隅を照らす人を信仰によってつくっていくという運動である。

それは伝教大師のおしえを現代に生かす、即ちおしえを体して、一人一人が信仰にめざめ、真に人間としての自覚にたちかえって、世の中に奉仕し、仏法による生活をひろめ、実践していくことによって幸せな平和な社会が<sup>(6)</sup>つくられていくことを目指している。

## ◆ この運動の会員は

・ 寺院の檀信徒及び住職をはじめとする寺院の家族全員であり、会員は入会金、年会費を払う。

## ◆ 寺院の役割

・ 檀信徒に対して、自分の寺である、という認識を深める。

「寺の檀信徒」であって「寺と檀信徒」ではない。

「寺の住職」であって「寺と住職」ではない。

その為には

・悩みをぶちまけて相談できる寺院、お互いの心の憩いの場としての寺院でなければならない。  
・まず寺院にある人々が、一人一人隅を照らす人になること、寺院に灯がついていれば、檀信徒は必ずその灯をたよりにして寺院に集まって来る。

・会員に、教団や本山の動きに関心をもってもらう。

教化、教育面等、自分たちの属している宗派がどのように活動しているか、を知らしめる。一隅運動の全体について(その機構、事業、出版物など)も含めて。

◆会員のつとめ

・会員は、せめて月一回は大師のみ心を現実の生活に「生かす日」を設ける「精進日」「一隅の日」とでも名づけ、反省したり、けじめをつける日とし、この日には会員はお寺に集まる。天台宗の宗旗や仏旗をあげ、精進日であることを知らしめる。そして宗歌を歌い、お勤めをして、本堂や境内、あるいはお墓の清掃等、奉仕をする。(口先だけでなく、行動する日とする)

・もし寺に集まらない場合は、家族そろって仏壇にお参りするか、お墓参りをする。

・それぞれの家庭で仏教の行事(年中行事)を理解させるようにする。

・仏壇を通じて先祖に感謝する心を浸透させる。情操を育てる意味で、児童に朝夕仏壇にお給仕させる。家庭に仏教行事を浸透させる。

食事の際の合掌「いただきます」「ごちそうさま」を家族中で行う。

以上のように、「一隅を照らす運動」は、伝教大師の教えを現代に生かすべく、檀信徒の心に信仰のともしびを付けて、そのともしびの実践、即ち行動の結果が一隅を照らす人材、一隅を照らす人として、社会の浄化に自ら促進し、自己のもっている信仰をして人々に伝えていくことを、眼目として<sup>(7)</sup>いる。

「おてつき運動」と同様に、「一隅をてらす運動」は一寺院の檀徒のみならず、広く寺院に興味があるものは年会費を払って会員になることができ、布教、伝道についても、住職のみならず、一隅会員がその中核となつて、一人でも多くの人々に天台のおしえを伝えていくところに特徴があり、この点は特に智山派の今後の教化運動の参考となるべき点ではなからうか。

天台仏教の現代化、大衆化への課題は、現代社会の諸問題を解決し、苦難を克服することにあるとして<sup>(8)</sup>いる。天台の仏教が、現代社会をどのように浄化するかを考えるとき、現代の天台文化の創造がもつともつと強力に展開されるべきである。そのためには、まず、天台の僧徒とその支持者が生きる道を確立することである。一人でも多くの共鳴者が結集して、強力な体制をつくり、学問と文化の成果をあげて、現代社会を発展させたい。結論をいえば、天台の政治、天台の経済、天台の社会事業、天台の建築、天台の出版、天台の図書館、天台の学校などすべての面に天台の考えを充満させ、現代社会の発展に役立ちたいとしている。

(b) つくしあい運動のめざした檀信徒像とは

さてここで、他宗派のめざした檀信徒像と比較する意味で、昭和四十五年に本宗の教化運動として提唱された「つくしあい運動」の目指した檀信徒像について述べてみたい。



「つくしあい」という言葉の一般的意義は「お互いにありつたけの限りを出し切っていく」ことであり、仏教的意義は、大乘根本の義「空の生活実践」「僧伽の生活実践」、秘密究竟の義「三密相応の生活実践」「相互供養の生活実践」である。そして運動の基本的姿勢は「大日如來の信仰運動」「三密行の徹底」「積極的生活姿勢」「和合衆意識の高揚」「生活意識の革命」である。

密教精神に基づき、僧俗一体による信仰運動を展開し、真に明るい家庭、平和な社会を建設することを目的とした、この運動に於ける檀信徒の役割は次のようになっていく。(つくしあい手帳参照)

- ① 仏壇の莊嚴
- ② 信仰の培養
- ③ つくしあい手帳の活用
- ④ 生活相談
- ⑤ 参拝旅行
- ⑥ 一生の行事

「おてつき運動」では総本山はその運動の中心となっているが、この運動に於ける総本山の役割は、総本山はつくしあいの核体であるから、役員は本宗僧侶の使命に生き、つくしあいの規範となり総本山としての機能が充分に発揮できるようにつくしあわなければならない、としている。

一九九〇年六月に開催された、第二十四回智山布教師大会にて、第一分科会において、「つくしあい」の問題が、討論されたが、それに先立ち、中央布教師会にて布教師を対象に行ったアンケートの結果は次のようであった。

Q 本宗教化理念「つくしあい」について、今後の展望等も合わせてご意見をお聞かせ下さい。（回収数20 N A |

11）

《◇印が1回答》

◇ 布教師会長として「つくしあい」「いかされている」、これらについて若い教師に呼びかけても、各人の主観が強く、なかなか呼応して来ない。今のところ展望に明るさがない。

◇ おしつけ的な「つくしあい」でなく、宗団・僧侶そのものの「つくしあい」を起点として考えないと、将来の展望発展が望めない。

◇ ①「つくしあい」が不明であるというか、いつから認知され宗団の柱（教化の）となったのか。この問題は大きい議論すべきである。②理念と実践への手段が不明のまま、理念の空回りの一人歩きは危険だ。

◇ 「つくしあい」運動は、現在の社会福祉の現況にない理念で、まことに良い運動と思う。続けて行くべき問題と思う。

◇ 「つくしあい」は本宗の教化理念として、かなり長年に亘って揚げられてきたか？その深まり広がりについて果たしてどうなのか。これの具体化について、もっとつっこんだ話し合いも必要と思うし、又これらについての検証のようなことも時には必要と思う。

◇ 教化理念としては大変結構。しかし、最初の頃はよく宣伝されていたが、途中、手を抜いた感があった。継続は力なり。

◇ 興教大師は宗祖大師を慕い、追体験してゆかただけでなく、それを通じて、「仏は大日を本尊とし、成仏をめざす」との言葉からも、法身如来と共に生きるつくしあいを御遠忌を通じて深めていくべきだろう。

◇ 地域に密着して、地域を動かしていくのを目標に掲げていくためにも、時代にふりかかっている老人問題について宗派をあげて教化を考えてみたらどうか。

◇ 教師一人一人の実践如何にかかっている。現在まで出された理念は不変なものであり、今後は行動によって、教化の実を挙げて行くのみであろう。

以上のアンケート結果から出された問題点から総括的に言えることは、「つくしあい」の理念を具体的な教化運動、実践へといかに進めていくかが、課題であるということである。

つくしあい運動は、宗団全体の運動として展開することなく、途中で挫折してしまい、現在ではその理念をとどめているだけである。

## 二、これからの檀信徒像をめざして

### (1) これまでの寺院と檀信徒との関わり方の問題点

#### (a) 葬儀・法事

葬儀とは人間の死と直面する、誰にとっても大変辛い、深刻な場面である。遺族は通夜、葬儀当日は弔問客への対応、葬儀の段取り等で、頭の中は一杯であろう。しかし、葬儀が一段落し、家族のものだけになると、あらためて、故人への思いが沸き、悲しみがこみあげて来る。そして、人の命のはかなさ、人生の無常さ、これから先どうやって生きていこうか等、様々な思いが頭の中を過ぎる。

あわただしい毎日を過ごしてきた人が、ふと人間の命ということに、人生というものに思いを寄せる、こうした機

会こそ、まさに教化が最も大切な機会なのではなからうか。

「葬式仏教」と批判的に言われてきたのは、我々教師の側が檀信徒に対し、人の葬儀を自分の身内の葬儀として深刻にとらえることなく、形式的に流して来た、つまり、葬儀から、人の死から、我々は、何を学ばなければならぬかを、訴えてこなかったことに原因があるのではないか。

ご本尊よりいただいた貴い命を精一杯に生かしていかねばならない我々の使命をこの時訴えずして、いつ訴えるのだろうか。

またその後の追善供養に於いても、追善とはどういうことか、私たちの毎日の生活の中で、善行を積んで行くとはどういうことか。故人の意志を継ぎ、故人の教えや願いを故人に代わり達成していく決意からはじまり、導いて下さる十三仏の功德が身にそなわるように、教えを仰いで行く生活の重要性等、これだけは話しておきたいということを、教師自身が、自分の問題として、積極的に訴えていけば、たとえ「葬儀仏教」などといわれても後ろめたい気持ちではないのではないか。

#### (b) 伝統行事

施餓鬼会、大般若会等、寺院には様々な伝統行事がある。それらの行事には、それぞれに色々な特色があるが、目的とするところは、教化である。檀信徒が行事に参加することによって、より信仰を深める、つまり信仰生活に導いていくことにある。

しかし、自分自身の経験から考えてみると、主催者である、寺院側としては、教化が目的であると分かっている、つまり、法要の形式や本堂の荘厳など、外面的な準備に気を取られ、行事をいかにわかりやすく理解してもら

えるか、更には、そのことによって、信仰心を深めてもらえるかということに、気持ちや落としがちである。

その点を見落として、伝統行事の形式的な面のみにとらわれていると、『これからの寺院行事』に述べられているように、報恩の行事は模倣だけの形骸となり、祈禱、回向の行事は世間的欲望追求の場となってしまいう可能性がある。この事は自分自身でもかなり、反省すべき点があるが、それでは伝統行事の意義を檀信徒に理解してもらい、なおかつその事によって、信仰生活に導いていく為にはどうしたらよいのであろうか。この点に留意した伝統行事のプログラムの作成は今後の自坊における課題である。

### (c) 日常生活

私自身が葬儀、法事、伝統行事以外に、檀信徒と触れ合う機会、話をする機会と云えば、自坊においては年に数回の世話人会ぐらいで、あとは、外においては青年会議所などでそれ程多くはない。

振り返ってみれば、若年のせいもあるかもしれないが、檀信徒と社会問題や人生問題等について突っ込んだ話をしたこともあまりないわけである。

新米住職として、これからは檀信徒との交流を密にし、檀信徒が何に悩み、何をどう考えているかを肌で感じたいと思っている。

つくしあい運動に於ける檀信徒の役割において「④生活相談では、教師僧侶とひざつきあわせ、胸襟を開いて話し合う習慣を造成する」としているが、僧侶と檀信徒が、お互いの悩みや、喜びを話し合って行くことは何故大切か。

それは、人間とは自分の喜びや悲しみには真剣になり、主体的に行動して行くようになり、その時に示された教えやアドバイスは、砂漠にまかれた水の如く吸収されやすいからである。

そうした意味で、今までの、檀信徒との交流の少なさを反省すると共に、これからは、伝統行事のみならず、「法話の会」を定期的に開催し、その折に、檀信徒の悩みなどを聞き、共に考えて行く機会にしたいと考えている。

(四) 真言宗の檀信徒像とは

檀信徒とは、菩提寺のご本尊さま、そしてその教えを生きる支えとして、住職と共に精進していく人々である。又、精神的にも、物理的にも、菩提寺を盛り上げていく人々である。

以上今まで述べてきた事柄を考えながら、ここに、私の私見による、檀信徒像を提示してみたい。

- 1、葬式、法事を縁にして、亡き人の供養を志し、それを通じて信仰を深めていく檀信徒。
- 2、寺院のグループ、組織の中で、リーダーシップのとれる檀信徒
- 3、住職と共に菩提寺の在り方について、真剣に話し合いながら、菩提寺の為に精神的にも物理的にも支援してくれる檀信徒

4、住職の社会活動に支援、協力してくれる檀信徒

- 5、菩提寺の伝統行事等に積極的に参加協力し、住職の推進する教化活動で学習しながら、信仰生活を深めていく檀信徒

6、菩提寺の文章を読み、自分の信仰について文章の書ける檀信徒

7、信仰のあゆみや有り難さを語れる、法話のできる檀信徒

8、住職と共に、お経を唱えることのできる檀信徒、修行のできる檀信徒

9、新宗教や因習・迷信に負けない檀信徒

10、菩提寺の本尊様と信仰という絆で結ばれ、真言宗のおしえを日常生活の指針として仰ぎながら生活するように努力していく檀信徒

三、まとめにかえて

何が問題か、今後の課題は

私の私見による、檀信徒像を提示してはみたが、日頃、葬儀や法事に追われ、あわただしく過ごしている私が、まず何からはじめなければならぬか、これからじっくりと考えてみたいと思っている。真言宗のおしえを日常生活の指針として仰ぎながら生活をする檀信徒をめざすならば、まず住職自らが実践していかねばならぬことは当然であろう。

今後の課題としては、

1、自坊のおかれているさまざまな状況を的確にとらえること。

檀信徒の現状、要望、寺院とのかかわりあいにおける特色を明らかにする。

2、寺院の伝統を生かし、特色をアピールし、年中行事を検討していくこと。

寺院の現状は、伝統的行事が中心であるから、そこに信仰のいぶきを与え、活性化させていく道筋が課題である。この信仰の輪を広げていくために、五年あるいは十年計画を設定し、自坊の目標を立てる必要がある。それに基づいて教化活動や諸事業の展開やその方策を考えていく。

3、文書伝道の重要性和機能性の再確認をすること。

教化の手段・方法は、これまで法話に重点がおかれてきたが、そればかりでなく、今日の多様なニーズに答え

檀信徒との連帯を深めていく情報源として、文書伝道には大きな役割がある。このことは、布教師とは法話ができるばかりでなく、文書伝道を通じて信仰をより高めていくことにも意欲のある、新しい布教師のイメージに展開するのである。

4、地域社会における寺院の問題として、教師が信仰の立場から、社会の諸問題に関心をもっていくこと。

家庭の問題や人権・環境問題など多くの問題が身近にある。特に人権問題としての同和問題や、環境・人道問題としての原子力発電所問題は、伝統教団に課せられた大問題であり、また現代医療の問題では、ホスピス等の問題が迫ってきている。

以上の項目をチェックポイントとして、自分自身の目指す、檀信徒像に向かって、教化活動にあたっていきたい。

註

- (1) 『浄土教から見た新宗教ノウハウ』北山宏明編二頁～五頁、九頁～一〇、一一頁
- (2) 『大法輪』平成二年九月号特集・新宗教とは何か「現代霊能ブームと若者」室生忠氏一〇六頁、一〇七頁
- (3) 同上二〇七頁、一〇八頁
- (4) 『明日への教団を考えるおてつき運動の調査から』一〇頁、一一頁
- (5) 「おてつき叢書IIおてつき運動」発行おてつき運動本部
- (6) 「二隅を照らす運動に関する小冊子」
- (7) 「二隅を照らす運動に関する小冊子」
- (8) 「二隅を照らす運動に関する小冊子」